

大学史編纂課だより

第7号

2014年9月10日 発行

目次

展示紹介

- ◇萩博物館での山田顕義展…………… 1
- ◇特別展「山田顕義と近代日本」について…………… 2
- ◇企画展「近代日本の幕開けと私立法律学校
― 神田学生街と法典論争―」について…………… 3

連載

- ◇日大・オリンピック⑥…………… 5
- ◇太平洋戦争と学徒⑥…………… 6



オープニングセレモニーでのテープカット

学祖山田顕義の故郷萩市で特別展を開催

4月19日から6月22日まで、山田顕義生誕170年特別展「山田顕義と近代日本」が山口県萩市の萩博物館で開催されました。学祖の特別展が地域博物館で開催されるのは今回が初めてです。特別展開催の前日には、萩市民や本学校友山口県支部の方など約100名を集めて同館でオープニングセレモニーが開催されました。長州藩は幕末に数多くの偉人を輩出しているのですが、地元でもあまり山田顕義の事績を知る人はそれほど多くはありません。この特別展は、故郷萩市の皆様に学祖山田顕義の人となりを知っていただく良い機会となりました。



展示会場の萩博物館企画展示室

特別展「山田顕義と近代日本」について



押田茂實本学名誉教授による特別講演

前頁でも紹介したとおり、学祖山田顕義の故郷萩市の萩博物館で生誕170年にあたる平成26年、特別展「山田顕義と近代日本」が開催されました。この特別展では、軍事・政治・教育と多方面に活動した山田顕義の事績を通じて、近代国家形成期の明治日本に果たした役割を紹介しました。

展示資料については、萩博物館と大学史編纂課が所蔵する学祖資料90点を実物展示し、その他の機関が所蔵する資料はパネルで展示しました。大学史編纂課からは52点を展示しましたが、とくに学祖の遺体レントゲンや頭骨の複製などの学祖墓所改装に伴う発掘調査資料は、来場者の関心を集めました。

特別展開催に併せて、いくつかのイベントも開催されました。5月25日には、山田顕義フォーラムが開催され、押田茂實本学名誉教授の「山田顕義の遺体が語るもの」と題した特別講演が行われました。押田名誉教授は、昭和63年から平成元年にかけて実施された護国寺の学祖墓所改装に伴う学術調査の現場を指揮された方で、当時のエピソードなどをお話いただきました。学祖墓所の学術調査が、法医学の分野だけでなく、被服構成学や文化人類学などの多岐にわたる学問分野の研究者約50名で実施されたことは、日本大学が総合大学だからこそできた学術調査だったというお話は強く印象に残りました。

このほか、今回の特別展担当者である道迫真吾主任



フォーラム終了後
(左から山本館長、押田本学名誉教授、道迫主任学芸員)

学芸員によるギャラリートークが会期中に3回実施され、大学史編纂課の松原が同館で開催された「史都萩を愛する会」の総会で、山田顕義に関する講演を行いました。

今回の特別展担当者である道迫主任学芸員とは、いつか萩市とゆかりのある山田顕義の企画展が開催できればと数年前よりお話をしていましたが、今回、萩博物館の全面的なご尽力により開催することができました。特別展の会期は65日間でしたが、この間、約12,500人の方にご来場いただきました。今回の特別展を主催された萩博物館の関係者の皆様、そして展示にご協力いただきました関係各位、関係諸機関の皆様方に改めて御礼を申し上げます。

(松原)



道迫主任学芸員によるギャラリートーク

企画展「近代日本の幕開けと私立法律学校—神田学生街と法典論争—」について

「近代日本の幕開けと私立法律学校—神田学生街と法典論争—」展が、平成26年1月24日から2月28日まで、神田駿河台の明治大学博物館特別展示室で開催されました。神田の街とともに歩んできた専修大学、中央大学、日本大学、明治大学の大学史資料をもとに4大学のアーカイヴズ（大学史編纂部署）が共同で実施した初の企画展となりました。

今回の企画展では、明治期に形成された神田学生街や明治中期の法典論争を中心として明治期の私立法律学校について紹介しました。神田地域には、明治以降、官立・私立学校が次々と設立されて学生街が形成されました。明治期の神田地域には多くの学生が下宿していたため、神田は通学の間だけではなく、学生が暮らす場でもありました。



展示会場の明治大学博物館特別展示室

明治23年（1890）に公布された民法・商法の施行を巡って繰り広げられた法典論争は、神田の私立法律学校をも巻き込みました。仏法派の明治法律学校（明治大学）、和仏法律学校（現法政大学）と英法派の英吉利法律学校（後に東京法学院と改称、現中央大学）を中心に大きな論争が繰り広げられ、結果的には延期派が勝利しました。しかし、法典論争以外では、私立法律学校はともに連携・交流を深めており、連合討論会なども精力的に実施されていました。この企画展では、主催した4大学の明治25年当時の講師陣をまとめましたが、多くの講師が複数の学校で講義をしていたことが分かりました。



各大学所蔵の神田関連写真をパネルで展示

大学史に関する諸活動は、基本的には所属する大学の歴史を中心に調査・研究をするものですが、複数の大学が集まってはじめて分かる事柄も数多くあります。さらには、他大学の資料情報を知り得ることも、大学アーカイヴズにとってはとても大切なことです。その意味では、今回のような他大学との連携による企画展示は、当課にとっても貴重な経験となりました。展示会場をご提供いただいた明治大学をはじめ、本展示にご協力いただきました関係各位に御礼を申し上げます。

明治期の私立法律学校については、まだ不明な点も数多くあるので、今後も複数の大学で連携して、調査・研究・展示活動を進めていきたいと思えます。

（松原）



会期中に実施されたギャラリートーク

添田寿一博士生誕150年記念式典



式典の様子

式典後は、老良地区公民館で“感謝の集い”が催され、会場には添田の揮毫書跡、鉄道院総裁時に着用した大礼服、高村光雲作のブロンズ像が展示されました。

(田淵)

5月3日、日本法律学校創立者の一人添田寿一（経済学者・大蔵官僚・銀行家・実業家として有名となった）の生誕150年記念式典が、郷里の福岡県遠賀町で執り行われました。遠賀町教育委員会では、「添田寿一博士生誕百五十年記念事業」として取り組み、大正9（1920）年に建立された顕彰碑の一面を公園として整備、町役場・小中学校校長・老良地区の皆さん、そして関東方面からも20数名の添田家縁者が参列しました。



老良地区公民館での展示

資料の寄贈

佐藤正弘本学前監事から、日本法律学校創立者の一人添田寿一および初代校長金子堅太郎の書跡資料の寄贈を受けました。添田寿一の一行書2幅と金子堅太郎の「今日一日の事」と題した扇面訓1幅です。松戸歯学部卒業の校友野坂純氏が旧蔵されていたとのことで、日本大学専門部工科土木科第7回卒業アルバム「蛭雪功」（昭和13年3月）1冊も併せて寄贈されました。

添田は幼少の頃から書道の才能があり、7～8歳にして「筑紫山濤」と号し、神童の名は一郷に高かったといわれます。（写真左）

(田淵)



連載 日大・オリンピック⑥

昭和39（1964）年10月10日～24日まで開催された第18回夏季オリンピック東京大会（東京五輪）は、今も記憶に残る大会です。代々木の国立競技場で約8万人の観衆が見守る中、オリンピック・マーチが演奏され入場行進が始まった瞬間など、テレビにかじりついていた筆者は鮮明に覚えています。東京五輪は、アジアで初めて開催されたオリンピックで、アジア・アフリカ諸国からの初出場が相次ぎ、94の国・地域から約5500人の選手が出場。日本選手団は総勢410人で、本学からは役員7人・選手45人が参加しました。

日本は金16・銀5・銅8合計29個のメダルを獲得する大健闘で、本学では、レスリング（フリースタイル）フライ級に出場した吉田選手が、本大会日本の金メダル第1号に輝き、同ライト級堀内選手が銅メダル、ミドル級の佐々木選手も5位に入賞しました。体操では、遠藤選手が個人総合・平行棒で金と床で銀メダル、早田選手が吊り輪で金メダルの活躍で、ローマ大会に次いでソ連（当時）を破り、体操男子団体優勝に大きく貢献し、渋谷選手も女子団体で3位になっています。水泳では、オリンピックの直前、第40回日本学生選手権大会で3種目を制覇し、しかも今シーズン世界最高記録を出している福島選手に金メダルの期待が寄せられましたが、200m背泳で4位の成績でした。後藤選手が出場した400mリレーは、日本新記録をマークし4位に入賞。佐藤選手が出場した男子バレーボールは銅メダルを獲得しています。

「ここにもいる五輪参加者」

『日本大学新聞』第686号に、東京五輪をサポートした、いわば裏方で活躍していた本学関係者の記事がありましたので紹介しておきましょう。

東京五輪の記録映画は、市川昆総監督の「東京オリンピック」として有名ですが、この映画製作の技術監督に芸術学部の碧川道夫教授、録音に井上俊彦助教授、そして映画学科3・4年生85名が助手として加わり活躍。また、文理学部の学生は、駒沢競技場へ施設管理・場内整理で教員・学生約180人が参加しています。

陸上競技や自転車競技のゴールインの写真判定は、計測技術員として渡辺俊平芸術学部長が関わっていました（渡辺氏は日本写真判定株式会社を設立し、公営競技大会で写真判定業務を担当していました）。幻となった第12回東京オリンピック（昭和14年開催予定）の組織委員会で、写真判定の研究に取り掛かった渡辺教授が構築したシステムの活躍です。

もう一つ、開会式で国立競技場の上空3000mに五輪の輪を描いた航空自衛隊ブルーインパルス（F-86）の編隊長は、昭和30年理工学部応用科学科卒業の松下治英一等空尉（幹部候補生として自衛隊に入隊後、37年に4代目編隊長に就任）。一つの輪の直径は2kmだそうです。

（田淵）

本学選手の成績

遠藤幸雄 (本学助手)	体操	金(団体・個人・平行棒) 銀(徒手)
早田卓次 (文理体育課)	体操	金(団体・吊輪)
渋谷多喜 (本学職員)	体操	銅(団体)
吉田義勝 (経済4年)	レスリングフライ級	金(フリースタイル)
堀内岩雄 (OB・38年卒)	レスリングライト級	銅(フリースタイル)
佐々木龍雄 (経済4年)	レスリングミドル級	5位(フリースタイル)
佐藤安孝 (OB・37年卒)	バレーボール	銅(団体)
後藤忠治 (OB・38年卒)	水泳自由形100m	4位(400mリレー)
福島滋雄 (経済4年)	水泳背泳200m	4位(200m背泳)・ 5位(400mメドレー)
石川健二 (経済1年)	水泳平泳200m	5位(400mメドレー)
中島 功 (OB・38年卒)	水泳蝶泳200m	5位(400mメドレー)



記念パッチ（文理学部体育学科蔵）

証文 太平洋戦争と学徒⑥

援農（前号参照）と同様に、昭和18（1943）年になると軍需工場での作業も、組織的に実施されることとなります。

日本大学の場合、部科校ごとに勤労先を割り当て、夏季休暇期間などを利用して、動員期間が1ヶ月以上に及ぶこともありました。こうした奉仕活動の枠を超えた勤労作業には報奨金が支給されました。同年7月21日に通達のあった「学徒勤労働員二関スル件」（厚生省発勤334号）では、受け入れ側に対して、通勤の大学生及び専門学校生には、1日男性80銭・女性65銭の謝金、業務で死亡した場合は弔慰金300円などの支給が指導されています。参考に同年の米価は10kgで3円36銭3厘（『物価の文化史事典』展望社）でした。

昭和19年1月18日には「緊急学徒勤労働員方策要綱」が閣議決定され、学徒1人の動員期間は年間4ヶ月以上となります。受け入れ側に対しては、残業や深夜就業の手当でも定められますが、日本大学では、支給された報奨金は工場側の責任者に組合貯金にしてもらい、卒業か軍への入隊時に一括して父母に送付することとしました。実際のところ、この頃には現金があっても買える物が無い状況でした。



日本製鋼の寮（牛込源晃氏蔵、右端が同氏）



昭和19年6月～9月に専門部商科・経済科が動員された
日本特殊鋼株式会社羽田工場

前号で取り上げた牛込源晃氏予科文科生は、19年度に入ると、府中の日本製鋼武蔵製作所での作業に動員されました。中河原にある同社の社員寮での寄宿生活を送りながらの、昼夜2交代の勤務でした。作業内容は旋盤を使っての金属加工で、機銃弾の薬莖などを作っていました。この社員寮は、戦後はそのまま日本大学の寮となっています。

同期生の大村政男氏（日本大学名誉教授）によると、寮と工場の往復で、学校の授業を受けることもなくなったため、昼休みや勤務後に先生を囲んで講義を聴くこともあったそうです。

（高橋）

創立者斯波淳六郎・理事戸水寛人の調査—金沢市—



津田玄蕃邸

大学史編纂課では、平成26年3月に日本法律学校創立者の一人である斯波淳六郎と明治期に理事を務めた戸水寛人の調査を、石川県金沢市で実施しました。

斯波淳六郎は、文久元年（1861）に金沢藩家老津田正行の三男として生まれました。津田家は名門斯波氏の末裔で、明治初年に斯波姓に復しています。明治22年（1889）の日本法律学校創立に参画し、講師として憲法を担当しています。その後も幹事や理事として、創立者のなかで最も長く本学に関係しました。

戸水寛人は、斯波と同じ文久元年（1861）に、金沢藩士戸水信義の長男として生まれました。明治30年（1897）から日本法律学校

の講師を務め、民法やローマ法を担当していましたが、明治33年に斯波の後を受けて理事に就任しました。両者とも校長松岡康毅を支え本学の発展に貢献しています。

金沢市では、市立玉川図書館及び近世史料館、県立図書館、石川四高記念文化交流館、石川護国神社、金沢城下などを調査しました。近世史料館では、斯波・戸水家の家譜等を調査し、館員の方のご教示により、淳六郎名が記載された明治3年（1870）の斯波家の「先祖由緒并一類附帳」を見つけることができました。

また、斯波ゆかりの津田玄蕃邸は、現在兼六園に移築されていますが、もともとは金沢城大手門前にあり、その敷地内に明治3年（1870）金沢医学館（金沢大学医学部の前身）が設置されました。

（小松）

全国大学史資料協議会東日本部会2014年度総会開催

5月29日（木）、2014年度東日本部会の総会が、立教大学池袋キャンパスを会場に開催されました。総会では役員改選が行われ、本学は部会長校に選出されました。

引き続き、立教学院展示館の開館を記念するシンポジウムが、「大学の新しい使命と展示活動—アカウンタビリティと自校教育を中心に—」をテーマに開催されました。西山伸氏（京都大学大学文書館）の「京都大学における歴史展示」、小枝弘和氏（同志社大学同志社社史資料センター・社史資料調査員）の「同志社大学における展示活動—現状と課題—」、豊田雅幸氏（立教学院展示館）の「立教学院展示館—施設と活動の特徴—」の報告をもとに、大学史展示のあり方について討論が行われました。

シンポジウム終了後、メーザーライブラリー記念館2階にオープンしたばかりの立教学院展示館を見学しました。同館は、教育・研究活動の学術的発信と自校史学習の場として活用されることを目的に設置されたもので、最新のデジタル技術を駆使した施設となっていました。



東日本部会2014年度総会

